

文學部哲學がゼミナートから

## 明治大学の学友に訴える

現在、明治大学は中教審答申一大學立教精神、明大才半廢に向け、全學バリード上封鎖令をつけてやつて、いる。我々世論也ミニールは、歴史内に激しく運動してさだ現代社會にベリストが強く提進して、また、大學、社會問題力甚著と、その方同性に対する我々の考え方を篤としてみたい。

今日の社會に於ける三種類の思潮は、實業主義的、社會主義的、國民的三個標準にして存在する。それで當然であります。その以外の価値觀は、本質的意味において是とされてゐるものである。そこで當然現体例内に於ける大學も大して例外ではない。専門研究の自由」という理想的、藝術的美術の上に、現在の大學の本質的実態は確立されてきた。そしてまたかも現在の大學に眞の意味の大學が存在して、いろいろなことを想を抱いていたに過ぎなかつたと、いうことを知る必要がある。本来の大學は知識の進歩による動的で新しい価値体系の創立の場として存在すべきものである。

我々一向は流動系運動体として自己否定を繰り返すことによって自己を革去し、常に革新し、価値觀の創造を追求すれば必ずしもいい。そのような無常立てば現在的に存続する大學が理想かいかに非人間的であり、教養性も有れているか明らかにわかると思ふ。

現在、學生の物理的ペリードは失して、社會には大手小批評がある。しかし何かう、現在の我々は現体制による非常に狡猾なる知能ペルトによる徹底的な攻撃を受けており、その結果として現代社會はかどい知的荒廢の狀態にあるのだといふことを認識せねばならない。そして今のような荒廢した社會を我々は厳しく警戒し、激しく諷刺しなければならぬ」と思ふ。

以上のように、費城を離れて、我々は医学で三十九本の後どのよき方針を確立して、人々に明らかにしたい。

(方針)へ一歩進むことを研究するにあたって

その本質的側面を西洋のものと見てある。

哲学、思想が問題に、個別特殊な趣向を背景にして形成されたものがあるが故に、哲学思想を今複数から外所産を必要とする、マルクス主義思想も、実存主義思想も、次にカントを筆頭とするトマス・ロマン主義哲学、ハイニヒナ、ニーライニゲ、ニコライエルマヌヘルを通じて、ドイツ概念論哲学の癡大成としてのヘーゲル哲学の分析、邊境から生まれて来たものである。キリスト教では、ヘーゲルの「世界精神」に「神」が吸収され、開拓する水平化されることにより、「個々のかけがえのない個別性」、「実存」立正教方名によって、自己の哲学を形成していく。スマルクスによつては「世界精神」に基盤を置く、概念的、抽象的観点に依りし、歴史、社会を論じる人間の実際的行動に注目から生發する二つによつて、マルクス主義思想を形成した。その意味で、ケーナル哲学の理解が想起的侧面から現代を捉えようとするとき、不可欠に必要とされる。

現在の我々の哲セミは私設セミという形態をとつてゐるが、このセミ形態を發展させ、活動的規律制からの一方的押し付けある現在の大学制のカリキュラム編成（学園の私的所蔵）を追求する教育、研究開展、そして、それが立ち支えている社会全体を運営するものとして位置づけである。

### 哲セミ活動は

日時 毎週土曜  
P.M. 5:00 ~ 7:00

場所 和泉3号館 12番教室

※哲セミに入られた方はどうぞ多歓御参加下さい。

文学部 哲学セミナール

1969  
7/4 記